

生成 AI と大学生・大学院生に関する調査

文教大学情報学部メディア表現学科 3年 高橋ひかり

目次

1. はじめに.....	2
2. 調査概要とリサーチ・クエスチョン.....	3
3. 調査結果.....	5
3-1. 回答者の基本属性.....	5
3-2. 生成 AI の利用について	5
3-3. 因子分析と重回帰分析	14
4. おわりに.....	18

1. はじめに

2023 年 5 月、文教大学では「大学での生成系 AI の活用について」という、大学での Chat GPT 等の活用についての見解が公開された。内容は、「近年の AI 技術進歩により、教育業界でも生成系 AI の活用が議論されている。AI は情報提供のツールとして有益だが、誤った使い方をすると、思考力や判断力の成長を阻害し、文教大学の学位授与方針の達成を困難にする可能性がある。AI を理解し、正しく扱うことが重要である。」ⁱ というものである。AI 活用の際に留意すべき事項の例もサイト内に挙げられており、大学側は学生ら一人ひとりが生成系 AI の利用について、しっかりと考えて活用することを求めている。

昨年 10 月から 11 月に行われた、全国大学生生活協同組合連合会による国公私立の 31 大学に通う学部生を対象に行われた調査では、生成 AI の利用状況について「継続的に利用」と回答した学生が 2023 年には 28.9%だったところ、2024 年には 50.4%と増加している。ⁱⁱ

このように、1 年で約 2 倍近くの増加がみられることから、学生に生成 AI の利用がより浸透しつつあるといえる今、インターネットでは「生成 AI 利用の学生、3 割が『コピペ』で課題提出…回答の確認方法は 6 割超が『知らない』」ⁱⁱⁱや、「学生に『生成 AI を使うな』と言うのはナンセンスだ」^{iv}とタイトル付けされた記事など、生成 AI と学生についての記事が、生成 AI のブームが来たとされる 2022 年^vから 2025 年にわたり複数投稿され、学生と生成 AI との関わり方について、生成 AI 普及から現在に至るまで問題視されている。

文部科学省は、「大学・高専における生成 AI の教学面の取扱いについて」という報道発表にて、生成 AI 利用者の急増と、生成 AI の教育活動における活用可能性やリスクなど正負両面の影響を指摘されていることを示し、各大学、高専が教育の実態等に応じて今後の状況変化も踏まえ指針等の内容を見直すことを含めた対応が必要と指摘している。また、利活用が想定される場面例と、留意点についても具体的に記されており、これらを踏まえて「生成 AI を含む AI の利活用に当たっては、各大学・高専の学生等が、その最新の動向、AI の普及による可能性とリスク、倫理面やデータリテラシー等を含むデジタル化社会に対応するための基礎的な知識・能力等について理解・習得することが重要である。また、そうした AI に関する授業科目等については、AI に関する技術の進展や社会での活用状況等を踏まえて、適宜改善を図ることも重要である。」^{vi}と述べている。

国や大学側は学生の生成 AI 活用について、学生が能力形成におけるリスクを含め AI を理解し、正しく扱うことを求めている。そこで、大学や授業の担当教員から生成 AI 活用についての指示を受ける学生側は、実際には生成 AI に対してどのような意識を持っているのか。本調査では、これらの疑問を明らかにし、生成 AI の利用状況及び、生成 AI の利用が学生自身の能力形成に与える影響に関する認識について実証的な把握を試み、調査結果の分析、考察を通じ、より効果的な学生の生成 AI 活用の形を探るため、生成 AI と大学生に関して、学業に関する事柄を中心に調査を行った。

2. 調査概要とリサーチ・クエスチョン

生成 AI と大学生・大学院生に関する意識調査の概要は次である。調査期間は 2025 年 11 月 10 日～11 月 12 日であり、調査対象者は全国の大学生、大学院生の男女 100 人である。調査実施方法には、インターネットオンライン法を用いた自記式のアンケートを採用し、生成 AI を利用したことがあるかどうか、大学での教育で生成 AI の活用が広がっていくとしたらどのような利点、弊害があると思うか等、生成 AI と教育に対する認識を主に尋ねた。また、アンケートに答えてもらう人を選ぶ標本抽出の方法は、スクリーニング調査をあらかじめ行い、該当した回答者に本調査を行った。

スクリーニング調査の調査対象は、調査会社 Freeasy の登録モニターのうち全国の男女 18 歳以上 79 歳以下を対象とし、その中から 2000 人サンプルを選定した。具体的な内訳は次である。10 代男性 40 人、10 代女性 40 人、20 代男性 200 人、20 代女性 200 人、30 代男性 200 人、30 代女性 200 人、40 代男性 200 人、40 代女性 200 人、50 代男性 180 人、50 代女性 180 人、60 代以上男性 180 人、60 代以上女性 180 人に調査を行った。

そのサンプルの中から、生成 AI について、大学生、及び大学院生に調査を行いたいため、まず、Q5 の、「あなたのご職業をお教えてください。以下の項目について、あなたにあてはまるものを 1 つだけ選んでください。」という問いに対して、大学生、大学院生と回答している大学生 101 人、大学院生 16 人、計 117 人に対象を絞った。(図 2.1)

そして、Q3-5 の、「あなたの SNS や生成 AI の利用についておうかがいします。以下の項目についてそれぞれ、「1. はい」か「2. いいえ」でお答えください。- 仕事や学業で生成 AI を使ったことがある」という問いに対して、2000 人のうち、「はい」と回答したのは 498 人、「いいえ」と回答したのは 1502 人だった。そのうち、大学生 101 人のうち「はい」と回答したのは 60 人、「いいえ」と回答したのは 41 人、大学院生 16 人のうち「はい」と回答したのは 7 人、「いいえ」と回答したのは 9 人だった。そこで、以上を合わせた大学生、大学院生 117 人のうち、「はい」と回答した 67 人、「いいえ」と回答した 50 人から、「はい」と回答した 50 人、「いいえ」と回答した 50 人、計 100 人に対象を絞って本調査を行った。(表 2.2)

以上をかんがみて、本研究では次のリサーチ・クエスチョン (RQ) を設定した。

RQ 1 : 大学生・大学院生は、生成 AI を利用しているのか、利用意欲はあるのか

RQ 2 : 大学生・大学院生は、大学での教育で生成 AI の活用が広がった場合、どのような利点と弊害があると考えているのか

RQ 3 : 大学生・大学院生は、生成 AI に対してどのような姿勢や支援、制度を大学に求めているか

RQ 4 : 生成 AI に対する利点や弊害の認識は、生成 AI の利用方針に対する評価に関係するのか

表 2 調査概要

調査期間	2025 年 11 月 10 日～11 月 12 日
調査主体	メディア調査研究法 C(総合演習)
調査対象	全国の大学生・大学院生の男女 100 人
調査方法	インターネットオンライン法による自記式アンケート調査
標本抽出方法	調査モニターから大学生・大学院生を有意抽出
有効回答数	N=100
主な質問項目	生成 AI の利用及び利用意欲、生成 AI に対する認識、大学での教育における生成 AI 活用への認識等

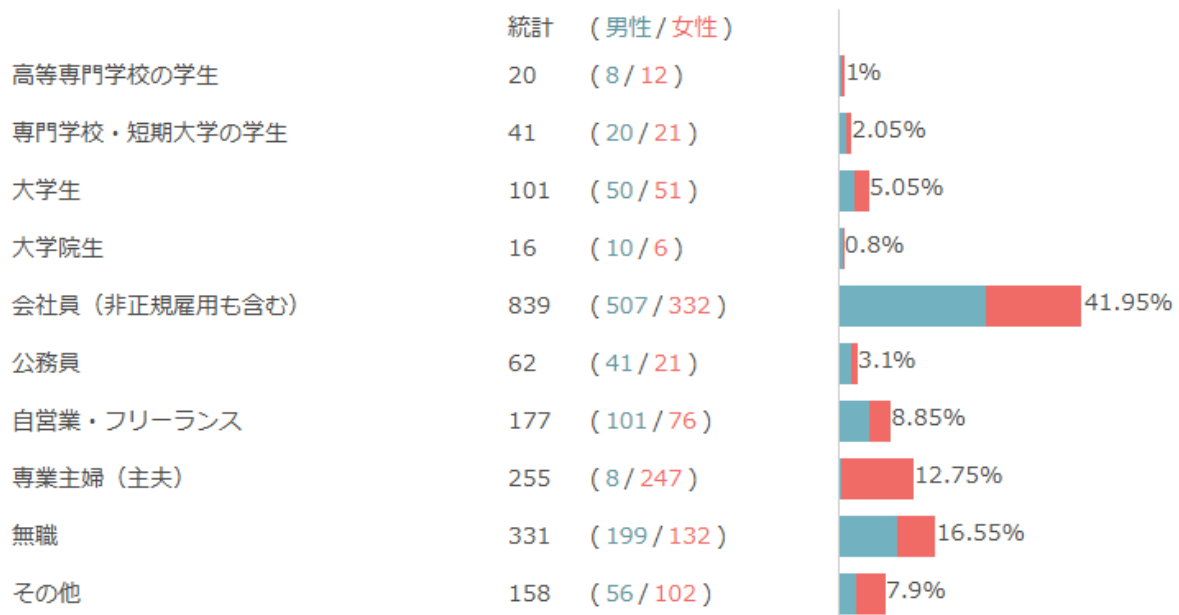


図 2.1 Q5 職業分布

		Q5 あなたのご職業をお教えてください。以下の項目について、あなたにあてはまるものを 1 つだけ選んでください。										
	N	N	高等専門学校の学生	専門学校・短期大学の学生	大学生	大学院生	会社員（非正規雇用も含む）	公務員	自営業・フリーランス	専業主婦（主夫）	無職	その他
Q3-5 あなたのSNSや生成AIの利用についてお答えください。以下の項目についてそれぞれ、「1. はい」か「2. いいえ」でお答えください。-仕事や学業で生成AIを使ったことがある	はい	2000	20	41	101	16	839	62	177	255	331	158
		100.0%	1.0%	2.1%	5.1%	0.8%	42.0%	3.1%	8.9%	12.8%	16.6%	7.9%
	いいえ	498	12	17	60	7	283	23	45	15	14	22
		100.0%	2.4%	3.4%	12.0%	1.4%	56.8%	4.6%	9.0%	3.0%	2.8%	4.4%
		1502	8	24	41	9	556	39	132	240	317	136
		100.0%	0.5%	1.6%	2.7%	0.6%	37.0%	2.6%	8.8%	16.0%	21.1%	9.1%

表 2.2 Q3-5 仕事や学業で生成 AI を使ったことがあるか

3. 調査結果

3-1. 回答者の基本属性

「あなたの所属している学部は何ですか。」という質問文を用いた。そして、答えの選択肢として、「文学部」「法学部」「経済学部」「情報学部」「理学部」「工学部」「農学部」「医学部」「薬学部」「看護学部」「その他」を設定して、あてはまる選択肢を一つ選んでもらう形で回答を求めた。その結果が以下の図 3.1 である。

回答者の所属している学部は、「工学部」が 18%、「文学部」が 17%、「理学部」が 14%、「経済部」が 10%、「法学部」が 7%、「情報学部」が 7%、「薬学部」が 5%、「看護学部」が 5%、「農学部」が 3%、「医学部」が 3%、「その他」が 11%であった。

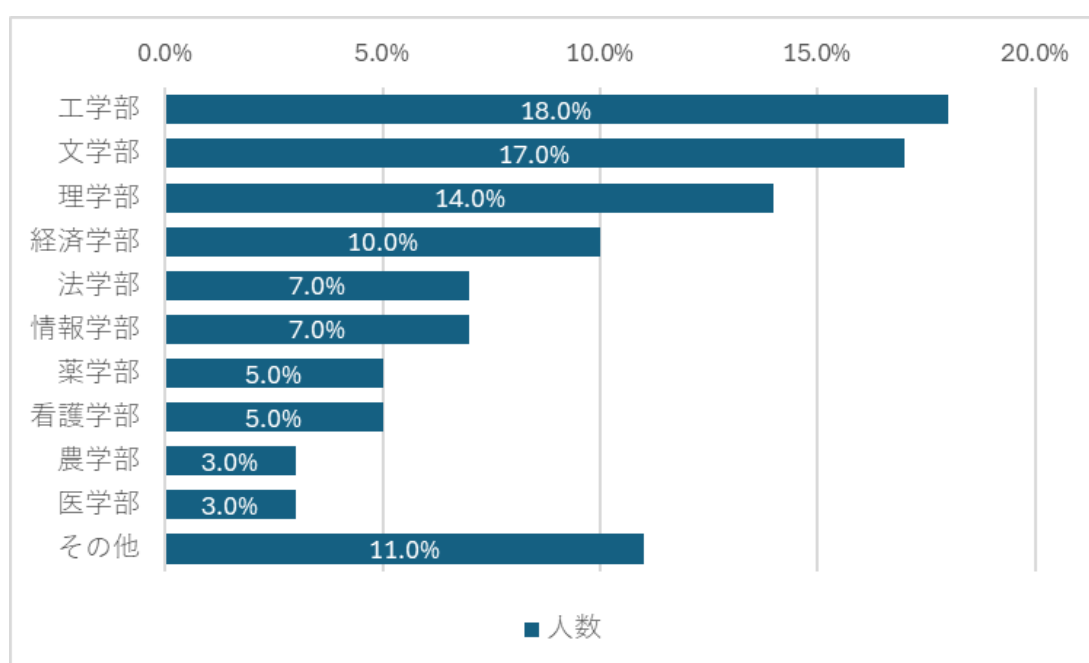


図 3.1 Q3-5 仕事や学業で生成 AI を使ったことがあるか

3-2. 生成 AI の利用について

続いて、生成 AI の利用状況について尋ねた結果を見ていく。

「あなたは以下のアプリや機能を利用していますか。また、今後利用する予定はありますか。」という質問文を用いた。そして、答えの選択肢として、「現在利用していて、今後も利用したい」「現在利用していて、今後は利用する予定はない」「現在利用していないが、今後は利用したい」「現在利用していないし、今後も利用する予定はない」を設定して、それぞれあてはまる選択肢を一つ選んでもらう形で回答を求めた。その結果が以下の図 3.2.1 である。

ChatGPT については、「現在利用していて、今後も利用したい」が 50%、「現在利用していて、今後は利用する予定はない」が 12%、「現在利用していないが、今後は利用したい」が 16%、「現在利用していないし、今後も利用する予定はない」が 22%であった。

Gemini については、「現在利用していて、今後も利用したい」が 23%、「現在利用していて、

今後は利用する予定はない」が 10%、「現在利用していないが、今後は利用したい」が 17%、「現在利用していないし、今後も利用する予定はない」が 50%であった。

Copilot については、「現在利用していて、今後も利用したい」が 19%、「現在利用していて、今後は利用する予定はない」が 6%、「現在利用していないが、今後は利用したい」が 15%、「現在利用していないし、今後も利用する予定はない」が 60%であった。

Grok については、「現在利用していて、今後も利用したい」が 15%、「現在利用していて、今後は利用する予定はない」が 7%、「現在利用していないが、今後は利用したい」が 13%、「現在利用していないし、今後も利用する予定はない」が 65%であった。

Claude については、「現在利用していて、今後も利用したい」が 14%、「現在利用していて、今後は利用する予定はない」が 10%、「現在利用していないが、今後は利用したい」が 10%、「現在利用していないし、今後も利用する予定はない」が 66%であった。

Adobe Photoshop については、「現在利用していて、今後も利用したい」が 14%、「現在利用していて、今後は利用する予定はない」が 10%、「現在利用していないが、今後は利用したい」が 9%、「現在利用していないし、今後も利用する予定はない」が 67%であった。

Bing については、「現在利用していて、今後も利用したい」が 14%、「現在利用していて、今後は利用する予定はない」が 7%、「現在利用していないが、今後は利用したい」が 12%、「現在利用していないし、今後も利用する予定はない」が 67%であった。

DeepL Write については、「現在利用していて、今後も利用したい」が 12%、「現在利用していて、今後は利用する予定はない」が 5%、「現在利用していないが、今後は利用したい」が 12%、「現在利用していないし、今後も利用する予定はない」が 71%であった。

LINE AI については、「現在利用していて、今後も利用したい」が 12%、「現在利用していて、今後は利用する予定はない」が 6%、「現在利用していないが、今後は利用したい」が 9%、「現在利用していないし、今後も利用する予定はない」が 73%であった。

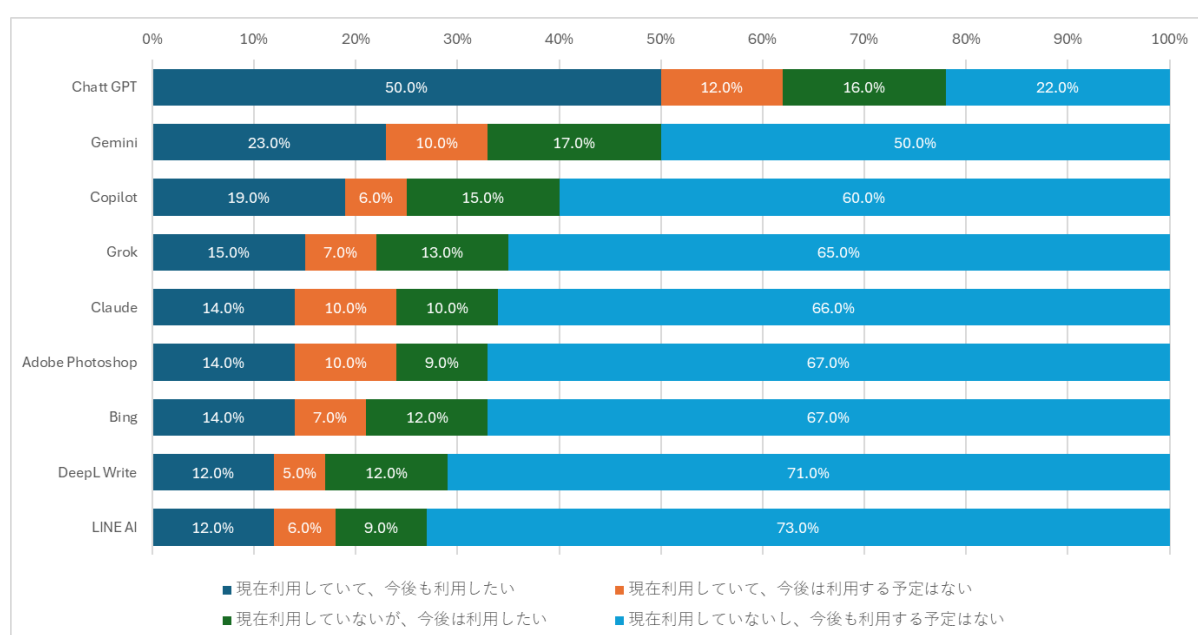


図-3.2.1 Q1 生成 AI の利用状況

「あなたは生成 AI について次のような経験がありますか。」という質問文を用いた。そして、答えの選択肢として、「大学で AI 利用に関する注意喚起や指導を受けたことがある」「調べ事に使ったことがある」「画像や映像の生成に使ったことがある」「論文・レポートの作成の参考にしたことがある」「外国語の翻訳・作文に使ったことがある」「相談・雑談相手に使ったことがある」「メールなどの文章作成に使ったことがある」「コンピュータのプログラミング・エクセルの関数作成に使ったことがある」「就職・インターンシップなどのエントリーシート作成の参考にしたことがある」「遊び・興味で使ったことがある」「あてはまるものはない」を設定して、あてはまる選択肢を全て選んでもらう形で回答を求めた。その結果が以下の図 3.2.2 である。

「調べ事に使ったことがある」と回答した者は 31.0%であり、「大学で AI 利用に関する注意喚起や指導を受けたことがある」と回答した者は 28.0%、「論文・レポートの作成の参考にしたことがある」と回答した者は 27.0%であった。「外国語の翻訳・作文に使ったことがある」と回答した者は 22.0%、「メールなどの文章作成に使ったことがある」と回答した者は 20.0%であった。「コンピュータのプログラミングやエクセルの関数作成に使ったことがある」と回答した者は 16.0%、「相談・雑談相手に使ったことがある」と回答した者は 15.0%であった。「画像や映像の生成に使ったことがある」と回答した者は 14.0%、「遊び・興味で使ったことがある」と回答した者は 12.0%、「就職・インターンシップなどのエントリーシート作成の参考にしたことがある」と回答した者は 11.0%であった。「あてはまるものはない」と回答した者も 28.0%いた。

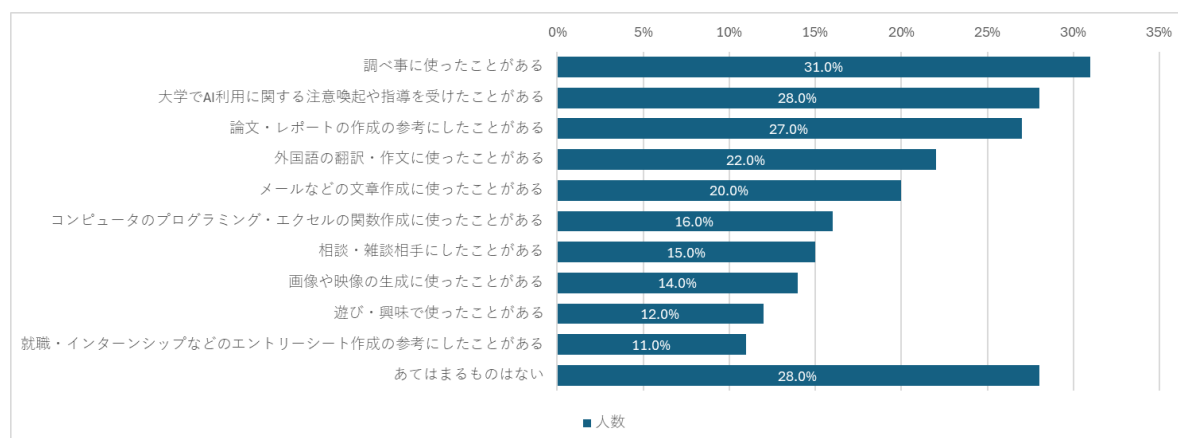


図 3.2.2 Q2 生成 AI を用いた経験

「生成 AI を利用したときの感想について教えてください。」という質問文を用いた。そして、答えの選択肢として、「とてもあてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」を設定して、それぞれあてはまる選択肢を一つ選んでもらう形で回答を求めた。その結果が以下の図 3.2.3 である。

[知らない知識を提供してくれた]、については、「とてもあてはまる」が 24.0%、「ややあてはまる」が 32.0%、「あまりあてはまらない」が 22.0%、「全くあてはまらない」が 10.0%、「利用していない」が 12.0%であった。

「レポートの作成がはかどった」については、「とてもあてはまる」が16.0%、「ややあてはまる」が35.0%、「あまりあてはまらない」が19.0%、「全くあてはまらない」が11.0%、「利用していない」が19.0%であった。

「相談の相手として役に立った」については、「とてもあてはまる」が19.0%、「ややあてはまる」が29.0%、「あまりあてはまらない」が20.0%、「全くあてはまらない」が11.0%、「利用していない」が21.0%であった。

「自分の代わりに考えてくれて楽ができた」については、「とてもあてはまる」が18.0%、「ややあてはまる」が28.0%、「あまりあてはまらない」が22.0%、「全くあてはまらない」が11.0%、「利用していない」が21.0%であった。

「嘘を提示しているのではないかと不安に思った」については、「とてもあてはまる」が18.0%、「ややあてはまる」が25.0%、「あまりあてはまらない」が30.0%、「全くあてはまらない」が14.0%、「利用していない」13.0%であった。

「親身になってくれて心強かった」については、「とてもあてはまる」が15.0%、「ややあてはまる」が28.0%、「あまりあてはまらない」が29.0%、「全くあてはまらない」が9.0%、「利用していない」が19.0%であった。

「個人情報that抜かれるのではないかと不安を感じた」については、「とてもあてはまる」が15.0%、「ややあてはまる」が23.0%、「あまりあてはまらない」が29.0%、「全くあてはまらない」が18.0%、「利用していない」が15.0%であった。

「上手な使い方が分からずイライラした」については、「とてもあてはまる」が12.0%、「ややあてはまる」が26.0%、「あまりあてはまらない」が28.0%、「全くあてはまらない」が17.0%、「利用していない」が17.0%であった。

「返答が的外れで役に立たなかった」については、「とてもあてはまる」が7.0%、「ややあてはまる」が31.0%、「あまりあてはまらない」が34.0%、「全くあてはまらない」が17.0%、「利用していない」が11.0%であった。

「存在しない資料や文献を提示されて困った」については、「とてもあてはまる」が7.0%、「ややあてはまる」が21.0%、「あまりあてはまらない」が31.0%、「全くあてはまらない」が27.0%、「利用していない」が14.0%であった。

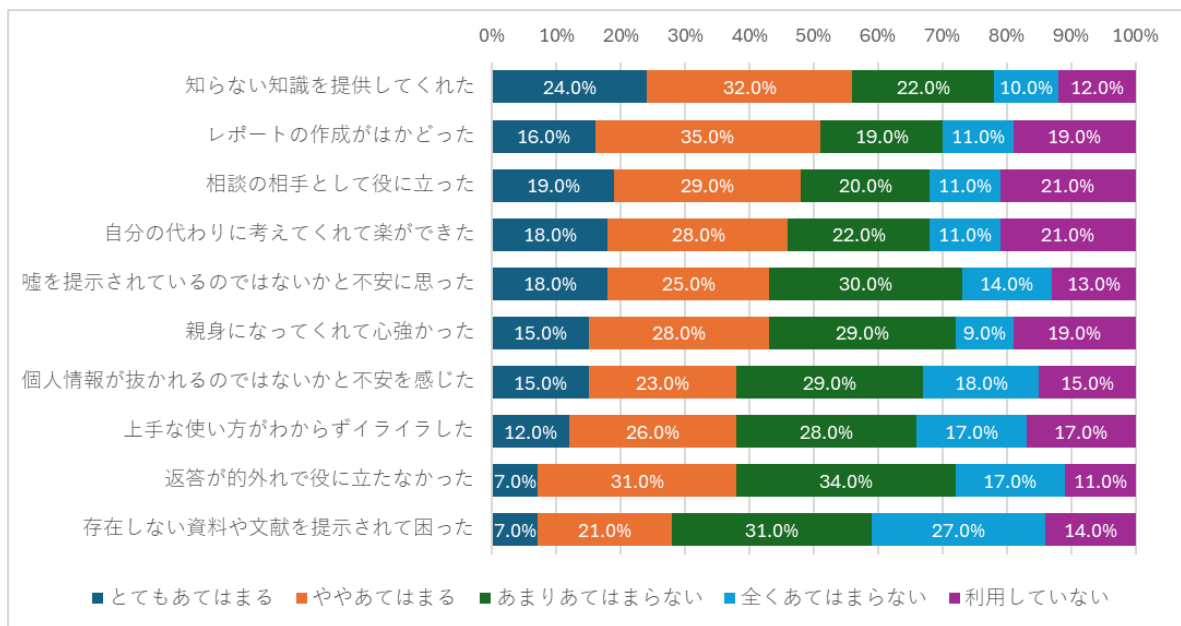


図 3.2.3 Q3 生成 AI 利用時の感想

「あなたはこの先、大学での教育で生成 AI の活用が広がっていくとしたら、どのような利点があると思いますか。」という質問文を用いた。そして、答えの選択肢として、「とてもあてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」を設定して、それぞれあてはまる選択肢を一つ選んでもらう形で回答を求めた。その結果が以下の図 3.2.4 である。

「新しい視点や知識にふれる機会が増える」については、「とてもあてはまる」が 19.0%、「ややあてはまる」が 44.0%、「あまりあてはまらない」が 25.0%、「全くあてはまらない」が 12.0%であった。

「提出物などの出来栄が向上する」については、「とてもあてはまる」が 18.0%、「ややあてはまる」が 44.0%、「あまりあてはまらない」が 27.0%、「全くあてはまらない」が 11.0%であった。

「講義がより円滑に進められる」については、「とてもあてはまる」が 14.0%、「ややあてはまる」が 48.0%、「あまりあてはまらない」が 27.0%、「全くあてはまらない」が 11.0%であった。

「学生個人に合わせた学習ができるようになる」については、「とてもあてはまる」が 19.0%、「ややあてはまる」が 42.0%、「あまりあてはまらない」が 29.0%、「全くあてはまらない」が 10.0%であった。

「講義資料制作のサポートなど、教員の負担が軽減される」については、「とてもあてはまる」が 23.0%、「ややあてはまる」が 37.0%、「あまりあてはまらない」が 29.0%、「全くあてはまらない」が 11.0%であった。

「AI を使いこなせる学生が増える」については、「とてもあてはまる」が 21.0%、「ややあてはまる」が 37.0%、「あまりあてはまらない」が 27.0%、「全くあてはまらない」が 15.0%であった。

「学習や作業の効率が上がる」については、「とてもあてはまる」が20.0%、「ややあてはまる」が37.0%、「あまりあてはまらない」が29.0%、「全くあてはまらない」が14.0%であった。

「学生の成績が向上する」については、「とてもあてはまる」が11.0%、「ややあてはまる」が44.0%、「あまりあてはまらない」が31.0%、「全くあてはまらない」が14.0%であった。

「相談相手がない学生が減る」については、「とてもあてはまる」が16.0%、「ややあてはまる」が38.0%、「あまりあてはまらない」が35.0%、「全くあてはまらない」が11.0%であった。

「学生の文章力や思考力が向上する」については、「とてもあてはまる」が9.0%、「ややあてはまる」が35.0%、「あまりあてはまらない」が42.0%、「全くあてはまらない」が14.0%であった。

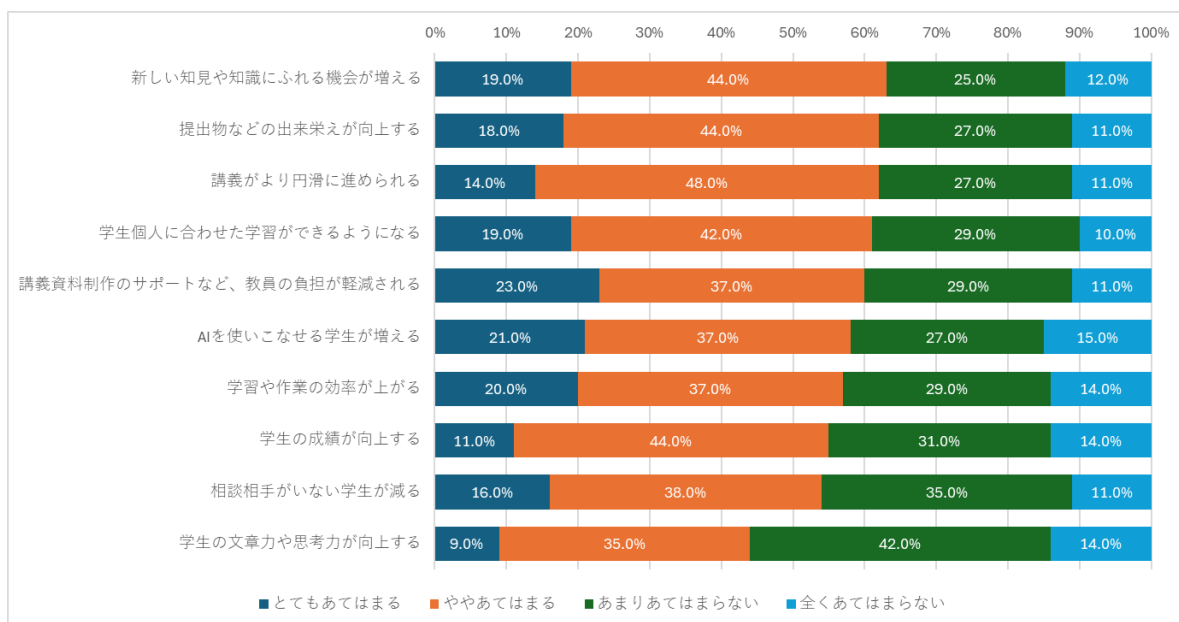


図 3.2.4 Q4 大学教育での生成 AI 活用で想定される利点

「生成 AI の活用が広がることで、どのような弊害が起こると思いますか。」という質問文を用いた。そして、答えの選択肢として、「とてもあてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」を設定して、それぞれあてはまる選択肢を一つ選んでもらう形で回答を求めた。その結果が以下の図 3.2.5 である。

「試験やレポートで不正行為が増える」については、「とてもあてはまる」が32.0%、「ややあてはまる」が36.0%、「あまりあてはまらない」が22.0%、「全くあてはまらない」が10.0%であった。

「不正チェックなど教員の負担が増える」については、「とてもあてはまる」が28.0%、「ややあてはまる」が38.0%、「あまりあてはまらない」が22.0%、「全くあてはまらない」が12.0%であった。

「根拠があいまいな間違った知識が広がる」については、「とてもあてはまる」が25.0%、

「ややあてはまる」が 41.0%、「あまりあてはまらない」が 26.0%、「全くあてはまらない」が 8.0%であった。

「使い方が分かる人と分からない人の差が広がる」については、「とてもあてはまる」が 22.0%、「ややあてはまる」が 42.0%、「あまりあてはまらない」が 27.0%、「全くあてはまらない」が 9.0%であった。

「不正をしたのではないかという疑いが増える」については、「とてもあてはまる」が 25.0%、「ややあてはまる」が 38.0%、「あまりあてはまらない」が 28.0%、「全くあてはまらない」が 9.0%であった。

「文章力や思考力が低下する」については、「とてもあてはまる」が 33.0%、「ややあてはまる」が 29.0%、「あまりあてはまらない」が 28.0%、「全くあてはまらない」が 10.0%であった。

「学生の成績が低下する」については、「とてもあてはまる」が 11.0%、「ややあてはまる」が 50.0%、「あまりあてはまらない」が 25.0%、「全くあてはまらない」が 14.0%であった。

「AI が提示する知識ばかりになって学生の個性がなくなる」については、「とてもあてはまる」が 20.0%、「ややあてはまる」が 40.0%、「あまりあてはまらない」が 30.0%、「全くあてはまらない」が 10.0%であった。

「AI に依存する学生が増えて嘘を見抜けなくなる」については、「とてもあてはまる」が 22.0%、「ややあてはまる」が 37.0%、「あまりあてはまらない」が 29.0%、「全くあてはまらない」が 12.0%であった。

「AI が講義をするようになって大学の先生がいなくなる」については、「とてもあてはまる」が 15.0%、「ややあてはまる」が 38.0%、「あまりあてはまらない」が 31.0%、「全くあてはまらない」が 16.0%であった。

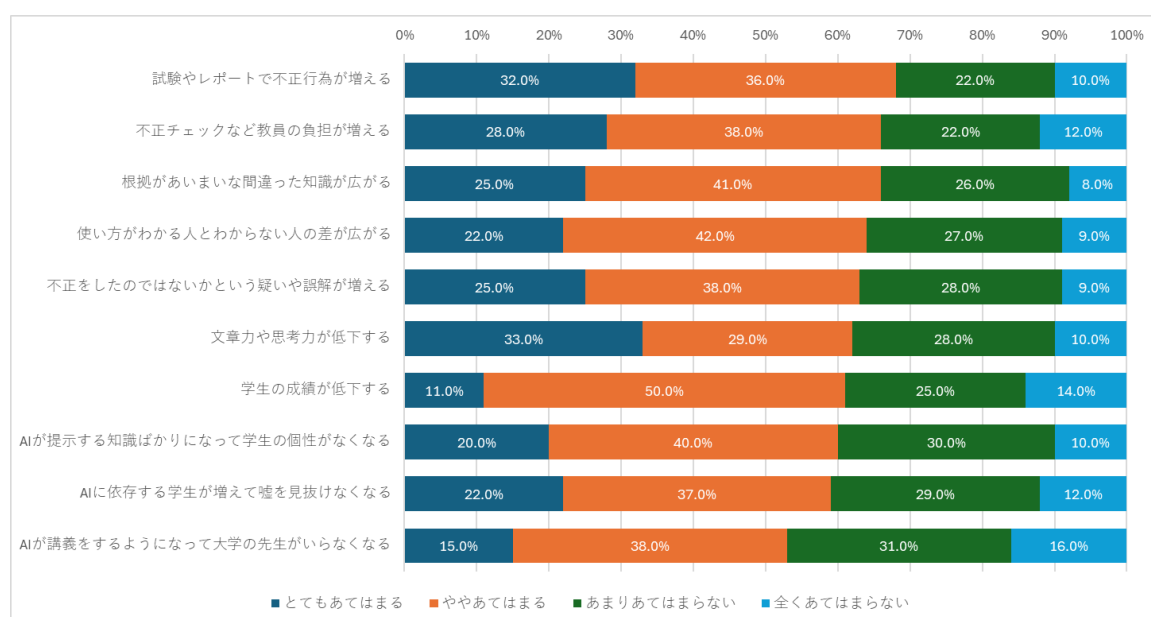


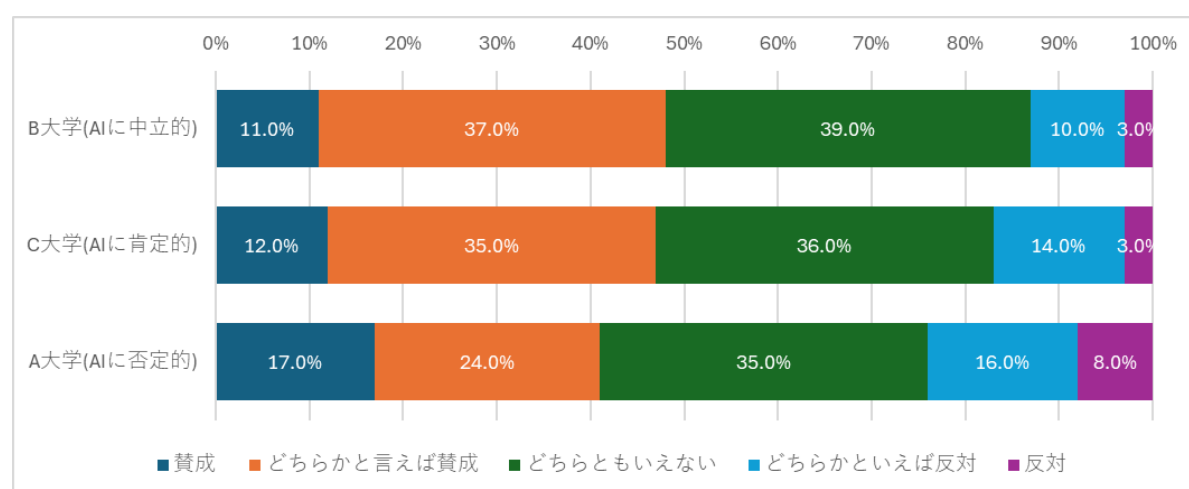
図 3.2.5 Q5 生成 AI 活用で想定される弊害

「以下の大学の方針に対して、あなたはどのように思いますか。」という質問文を用いた。大学の方針については、次のように設定した。A 大学の方針については、「生成系 AI の出力には、著作権侵害や剽窃とみなされる場合や誤りが含まれる場合があり、かつ、現時点では法整備も整っておらず、慎重な対応が求められています。生成系 AI の利用は他者の力を借りていることと同じ意味を持ちますので、各授業科目における課題やレポート、試験等において、生成系 AI を利用することは原則として全面的に認められません。」、B 大学の方針については「生成系 AI の登場により、本学における教育研究に新たな付加価値をもたらす可能性がある一方、生成系 AI の極端な依存による思考放棄や倫理的問題が発生するリスクがあります。このような時代において皆さんは改めて本学における建学の精神に立ち返り、注意事項を心にとどめ、生成系 AI を活用してください。」、C 大学の方針については「本学では、ChatGPT をはじめとする生成 AI について、一律に禁止することは行いません。むしろ生成 AI の可能性を追求し、それを効果的に使いこなせることこそが、21 世紀の社会で必要とされる人材です。」とした。A 大学は生成 AI 利用に対して否定的な方針で、B は中立的、C は肯定的と定めた。そして、答えの選択肢として、「賛成」「どちらかといえば賛成」「どちらともいえない」「どちらかといえば反対」「反対」を設定して、それぞれあてはまる選択肢を一つ選んでもらう形で回答を求めた。その結果が以下の図 3.2.6 である。

B 大学(生成 AI 利用に対して中立)については、「賛成」が 11.0%、「どちらかといえば賛成」が 37.0%、「どちらともいえない」が 39.0%、「どちらかといえば反対」が 10.0%、「反対」が 3.0%であった。

C 大学(生成 AI 利用に対して肯定的)については、「賛成」が 12.0%、「どちらかといえば賛成」が 35.0%、「どちらともいえない」が 36.0%、「どちらかといえば反対」が 14.0%、「反対」が 3.0%であった。

A 大学(生成 AI 利用に対して否定的)については、「賛成」が 17.0%、「どちらかといえば賛成」が 24.0%、「どちらともいえない」が 35.0%、「どちらかといえば反対」が 16.0%、「反対」が 8.0%であった。



図表 3.2.6 Q6 生成 AI に対する大学方針

「生成 AI を適切に活用していくために、あなたはどのような支援や制度が必要だと思いますか。」という質問文を用いた。そして、答えの選択肢として、「生成 AI の使い方・注意点についての説明や講義等の教育」「どこまで使って良いのか、授業ごとの基準や明確なルールをはっきりさせる」「生成 AI 利用に関して先生に相談できる・助言が得られる環境」「他の学生や先生の活用方法・体験談などを知る機会」「大学が推奨する生成 AI ツールの公式な提示」「生成 AI の利用促進に向けた補助金などの金銭的支援」「セキュリティとプライバシーを考慮したクローズ型生成 AI の提供」「実社会でどのように AI が使われているかについてのセミナーや講座の開設」「AI 利用の申告制・利用履歴の記録など、不正利用防止の仕組み」「学部ごとの特性にあわせた生成 AI 活用法の紹介など、各講義への取り入れ」「あてはまるものはない」を設定して、あてはまる選択肢を全て選んでもらう形で回答を求めた。その結果が以下の図 3.2.7 である。

「生成 AI の使い方・注意点についての説明や講義等の教育」と回答した者は 32.0%であり、「どこまで使って良いのか、授業ごとの基準や明確なルールをはっきりさせる」と回答した者は 31.0%、「生成 AI 利用に関して先生に相談できる・助言が得られる環境」は 22.0%であった。「大学が推奨する生成 AI ツールの公式な提示」は 20.0%、「AI 利用の申告制・利用履歴の記録など、不正利用防止の仕組み」は 16.0%、「他の学生や先生の活用方法・体験談などを知る機会」は 16.0%であった。「セキュリティとプライバシーを考慮したクローズ型生成 AI の提供」は 16.0%、「生成 AI の利用促進に向けた補助金などの金銭的支援」は 13.0%、「実社会でどのように AI が使われているかについてのセミナーや講座の開設」は 12.0%であった。「学部ごとの特性にあわせた生成 AI 活用法の紹介など、各講義への取り入れ」は 9.0%であった。「あてはまるものはない」と回答した者は 25.0%であった。

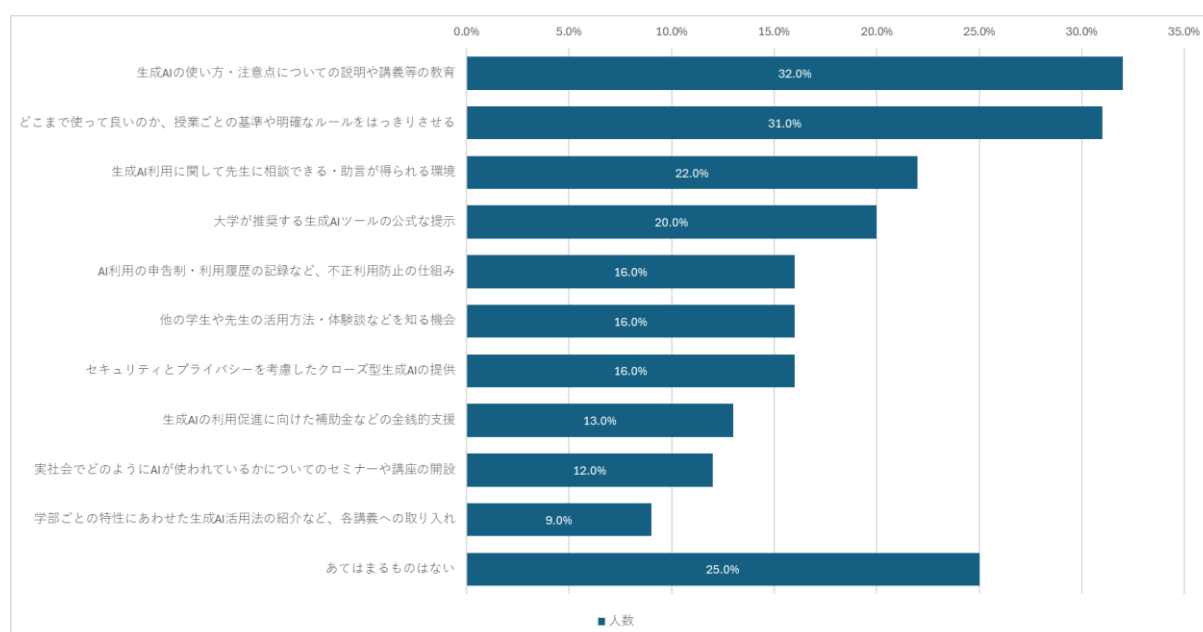


図 3.2.7 Q7 生成 AI 活用のために必要な支援や制度

3-3. 因子分析と重回帰分析

仮説を検証するために、生成 AI を利用したときの感想について、「レポートの作成がはかどった」と、「知らない知識を提供してくれた」、「相談の相手として役に立った」、「親身になってくれて心強かった」、「自分の代わりに考えてくれて楽ができた」、「嘘を提示されているのではないかと不安に思った」、「上手な使い方がわからずイライラした」、「存在しない資料や文献を提示されて困った」、「返答が的外れで役に立たなかった」、「個人情報が抜かれるのではないかと不安を感じた」を因子分析にかけた。因子分析の結果が以下の表 3.3.1 である。

因子 1 は、「自分の代わりに考えてくれて楽ができた」(0.781)と「相談の相手として役に立った」(0.682)、「親身になってくれて心強かった」(0.653)と「知らない知識を提供してくれた」(0.652)、「レポートの作成がはかどった」(0.621)という、「AI が対人的に役立った」と仮定した認知フレームから構成された。

因子 2 は、「レポートの作成がはかどった」(0.076)と、「返答が的外れで役に立たなかった」(0.988)、「上手な使い方がわからずイライラした」(0.617)と「存在しない資料や文献を提示されて困った」(0.567)、「嘘を提示されているのではないかと不安に思った」(0.452)という、「AI が役立たなかった」と仮定した認知フレームから構成された。

因子 3 は、「個人情報が抜かれるのではないかと不安を感じた」(0.985)という、「個人情報への危惧」と仮定した認知フレームから構成された。

表 3.3.1 Q3 の因子分析結果

		因子		
		F1	F2	F3
Q3-m5	自分の代わりに考えてくれて楽ができた	.781	-.106	-.028
Q3-m3	相談の相手として役に立った	.682	.141	-.324
Q3-m4	親身になってくれて心強かった	.653	-.087	.178
Q3-m2	知らない知識を提供してくれた	.652	.030	.090
Q3-m1	レポートの作成がはかどった	.621	.076	.046
Q3-m9	返答が的外れで役に立たなかった	-.088	.988	-.119
Q3-m7	上手な使い方がわからずイライラした	-.048	.617	.047
Q3-m8	存在しない資料や文献を提示されて困った	.116	.567	.166
Q3-m6	嘘を提示されているのではないかと不安に思った	.178	.452	.172
Q3-m10	個人情報が抜かれるのではないかと不安を感じた	-.013	.050	.985
因子抽出法：最尤法		因子相関行列		
回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法		F1		
		F2	.608	.319
		F3		.353

仮説を検証するために、この先、大学での教育で生成 AI の活用が広がっていくとしたらどのような利点があると思うかについて、「提出物などの出来栄が向上する」、「学生の文章力や思考力が向上する」、「新しい知見や知識にふれる機会が増える」、「学習や作業の効率が上がる」、「学生の成績が向上する」、「講義資料制作のサポートなど、教員の負担が軽減される」、「相談相手がいない学生が減る」、「AI を使いこなせる学生が増える」、「講義がより円滑に進められる」、「学生個人に合わせた学習ができるようになる」を因子分析にかけた。因子分析の結果が以下の表 3.3.2 である。

因子 1 は、「提出物などの出来栄が向上する」(0.785)と「講義資料制作のサポートなど、教員の負担が軽減される」(0.784)、「新しい知見や知識にふれる機会が増える」(0.747)と「学習や作業の効率が上がる」(0.705)、「学生の成績が向上する」(0.694)、「学生個人に合わせた学習ができるようになる」(0.683)と、「講義がより円滑に進められる」(0.675)、「AI を使いこなせる学生が増える」(0.658)、「相談相手がいない学生が減る」(0.653)と「学生の文章力や思考力が向上する」(0.617)という、「AI 活用の利点認識」と仮定した認知フレームから構成された。

表 3.3.2 Q4 の因子分析結果

		因子
		F1
Q4-m1	提出物などの出来栄が向上する	.785
Q4-m6	講義資料制作のサポートなど、教員の負担が軽減される	.784
Q4-m3	新しい知見や知識にふれる機会が増える	.747
Q4-m4	学習や作業の効率が上がる	.705
Q4-m5	学生の成績が向上する	.694
Q4-m10	学生個人に合わせた学習ができるようになる	.683
Q4-m9	講義がより円滑に進められる	.675
Q4-m8	AI を使いこなせる学生が増える	.658
Q4-m7	相談相手がいない学生が減る	.653
Q4-m2	学生の文章力や思考力が向上する	.617
因子抽出法：最尤法 回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法		

仮説を検証するために、生成 AI の活用が広がることで、どのような弊害が起こると思うかについて、「使い方がわかる人とわからない人の差が広がる」と、「試験やレポートで不正行為が増える」、「根拠があいまいな間違った知識が広がる」、「文章力や思考力が低下する」、「学生の成績が低下する」、「不正チェックなど教員の負担が増える」と「不正をしたのではないかという疑いや誤解が増える」、「AI に依存する学生が増えて嘘を見抜けなくなる」、「AI が講義をするようになって大学の先生がいなくなる」、「AI が提示する知識ばかりになって学生の個性がなくなる」を因子分析にかけた。因子分析の結果が以下の図 3.3.3 である。

因子1は、「文章力や思考力が低下する」(0.976)と「不正チェックなど教員の負担が増える」(0.865)、「試験やレポートで不正行為が増える」(0.736)と、「不正をしたのではないかという疑いや誤解が増える」(0.698)、「AIに依存する学生が増えて嘘を見抜けなくなる」(0.643)、「使い方がわかる人とわからない人の差が広がる」(0.634)、「学生の成績が低下する」(0.599)と、「根拠があいまいな間違った知識が広がる」(0.498)という、「思考力が低下して不正が増えることへの懸念」と仮定した認知フレームから構成された。

因子2は、「AIが講義をするようになって大学の先生がいらなくなる」(0.645)と「AIが提示する知識ばかりになって学生の個性がなくなる」(0.644)という、「AIが人の代わりになる」と仮定した認知フレームから構成された。

表 3.3.3 Q5 の因子分析結果

		因子	
		F1	F2
Q5-m4	文章力や思考力が低下する	.976	-.236
Q5-m6	不正チェックなど教員の負担が増える	.865	-.126
Q5-m2	試験やレポートで不正行為が増える	.736	.008
Q5-m7	不正をしたのではないかという疑いや誤解が増える	.698	.090
Q5-m8	AIに依存する学生が増えて嘘を見抜けなくなる	.643	.142
Q5-m1	使い方がわかる人とわからない人の差が広がる	.634	.219
Q5-m5	学生の成績が低下する	.599	.153
Q5-m3	根拠があいまいな間違った知識が広がる	.498	.338
Q5-m9	AIが講義をするようになって大学の先生がいらなくなる	-.158	.645
Q5-m10	AIが提示する知識ばかりになって学生の個性がなくなる	.092	.644
因子抽出法：最尤法		因子相関行列	
回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法		F1	.709
		F2	

以上の因子分析の結果に基づいて、重回帰分析を行った。

まず、A 大学の方針に賛成かどうかを従属変数にして、重回帰分析を行った結果は下の表 3.3.4 である。有意な因果関係が確認されたのは「個人情報への危惧」(0.022)だった。したがって個人情報への危惧がある人は、AI 利用に反対的な大学の方針に賛成という傾向が見られた。

表 3.3.4 A 大学の方針(AI 利用に反対)との重回帰分析

分類	標準偏回帰 係数(β)	有意確率	VIF
AI が対人的に役立った	.080	.631	2.239
AI が役立たなかった	.279	.095	2.209
個人情報への危惧	.290	.022	1.250
AI 活用の利点認識	-.162	.400	2.962
思考力が低下して不正が増えることへの懸念	.241	.151	2.248
AI が人の代わりになる	-.046	.740	1.588
R	.561		
自由度調整済決定係数(修正 R^2 値)	.242		

B 大学の方針に賛成かどうかを従属変数にして、重回帰分析を行った結果は下の表 3.3.5 である。有意な因果関係が確認されたのは「AI が役立たなかった」(0.014)、「AI 活用の利点認識」(0.034)、「思考力が低下して不正が増えることへの懸念」(0.027)だった。したがって AI が役立たなかったと思った人、AI 活用の利点認識している人、思考力が低下して不正が増えることへの懸念がある人は、AI 利用に中立的な大学の方針に賛成という傾向が見られた。

表 3.3.5 B 大学の方針(AI 利用に中立)との重回帰分析

分類	標準偏回帰 係数(β)	有意確率	VIF
AI が対人的に役立った	.062	.705	2.239
AI が役立たなかった	.407	.014	2.209
個人情報への危惧	.033	.784	1.250
AI 活用の利点認識	.404	.034	2.962
思考力が低下して不正が増えることへの懸念	-.368	.027	2.248
AI が人の代わりになる	-.014	.921	1.588
R	.588		
自由度調整済決定係数(修正 R^2 値)	.276		

C 大学の方針に賛成かどうかを従属変数にして、重回帰分析を行った結果が下の表 3.3.6 である。有意な因果関係が確認されたのは「AI 活用の利点認識がある」(0.002)だった。したがって AI 活用の利点認識がある人は、AI 利用に賛成的な大学の方針に賛成という傾向が見られた。

表 3.3.6 C 大学の方針(AI 利用に賛成)との重回帰分析

分類	標準偏回帰 係数(β)	有意確率	VIF
AI が対人的に役立った	-.056	.719	2.239
AI が役立たなかった	.304	.055	2.209
個人情報への危惧	-.131	.266	1.250
AI 活用の利点認識	.578	.002	2.962
思考力が低下して不正が増えることへの懸念	-.221	.164	2.248
AI が人の代わりになる	.056	.673	1.588
R	.625		
自由度調整済決定係数(修正 R^2 値)	.325		

4. おわりに

RQ1「大学生・大学院生は、生成 AI を利用しているのか、利用意欲はあるのか」については、ChatGPT が特出して利用率が高く、利用意欲も高く半数を超える結果となった。

RQ2「大学生・大学院生は、大学での教育で生成 AI の活用が広がった場合、どのような利点と弊害があると考えているのか」については、新しい視点や知識にふれる機会が増える、提出物などの出来栄が向上する、という利点が特に多く、思考力が低下して不正が増えることへの懸念や AI が人の代わりになるという懸念の傾向が見られた。

RQ3「大学生・大学院生は、生成 AI に対してどのような姿勢や支援、制度を大学に求めているか」については、中立的である方針に賛成する者が一番多く、生成 AI の使い方・注意点についての説明や講義等の教育を求めている者が最も多かった。

RQ4「生成 AI に対する利点や弊害の認識は、生成 AI の利用方針に対する評価に関係するのか」については、個人情報への危惧がある人は、AI 利用に反対的な大学の方針に賛成し、AI が役立たなかったと思った人、AI 活用の利点認識している人、思考力が低下して不正が増えることへの懸念がある人は、AI 利用に中立的な大学の方針に賛成、AI 活用の利点認識がある人は、AI 利用に賛成的な大学の方針に賛成という傾向が見られた。

i 文教大学” 大学での生成系 AI の活用について”

(https://www.bunkyo.ac.jp/news/archive/2023/story_40369.php)(2025 年 4 月 24 日閲覧)

ii 全国大学生生活協同組合連合会” 第 60 回学生生活実態調査 概要報告”

(<https://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html>)(2025 年 4 月 24 日閲覧)

iii 読売新聞オンライン” 生成 AI 利用の学生、3 割が「コピペ」で課題提出...回答の確認方法は 6 割超が「知らない」”(<https://www.yomiuri.co.jp/kyoiku/kyoiku/news/20240815-OYT1T50207/>)(2025 年 4 月 24 日閲覧)

iv 東洋経済 ONLINE” 学生に「生成 AI を使うな」と言うのはナンセンス”

(<https://toyokeizai.net/articles/-/700350?page=3>)(2025 年 4 月 24 日閲覧)

v 総務省”令和 6 年版 情報通信白書 AI 進展の経緯”

(<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r06/html/nd131100.html#:~:text=%E7%AC%AC1%E7%AF%80%20AI%E9%80%B2%E5%B1%95%E3%81%AE%E7%B5%8C%E7%B7%AF%E3%81%A8%E7%94%9F%E6%88%90AI%E3%81%AE%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%91%E3%82%AF%E3%83%88&text=2022%E5%B9%B4%E9%A0%83%E3%81%8B%E3%82%89%E3%81%AE%E7%94%9F%E6%88%90,3%2D1%2D1%EF%BC%89%E3%80%82>)(2025 年 4 月 28 日閲覧)

vi 文部科学省” 大学・高専における生成 AI の教学面の取扱いについて(周知)” (chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.mext.go.jp/content/20230714-mxt_senmon01-000030762_1.pdf)(2025 年 4 月 24 日閲覧)